

信州大学

信州大学農学部附属演習林における 2019 年のトピック

平成 30 年 9 月に教育関係共同利用拠点として再認定されたことにより、令和元年度より「信州を舞台とした自然の成り立ちから山の生業までを学ぶ教育関係共同利用拠点」として、新たな教育プログラムを始動した。木下渉技術専門職員が「教育・研究利用を目的とした架線集材システムの構築および技術指導」をテーマに、第 21 回全国大学演習林協議会森林管理技術賞「技術貢献賞」を受賞した。

手良沢山ステーション

令和元年 4 月を起首とする森林経営計画を長野県上伊那地域振興局林務課に提出した。学生実習による人工林初期保育の実行量が近年学生定員の減少等の理由により低下している。本年度はこれまで学生実習で行っていた 6 齢級ヒノキ林の枝打ちを外部業者の請負とし、造林補助を申請した。手良沢山演習林から出荷する材は緑の循環認証会議 (SGEC) の認証材として伊那木材センターに出荷している。11 月の記念市では 366m^3 あまりのヒノキ材を出荷して、430 万円あまりの素材収入を得た。



伊那木材センターのヒノキ樫



信大 SGEC の極印

構内ステーション

マツノザイセンチュウによるアカマツの枯死が構内演習林内で顕在化している。この事態を受けて構内演習林の管理方針を一部変更し、アカマツを積極的に伐倒していくことに方針転換した。構内演習林のうち、農場と接する 8~11 林班 4.3ha 内に生育する胸高直径 30 cm 以上のすべてのアカマツを 2019 年度から 2024 年の間に順次択伐することとした。この択伐によって合計 436 本、 $1,092\text{m}^3$ のアカマツが伐出されることになる。伐採後はアカマツを含むコナラ、エドヒガン等の高木種の後継樹、および下層を占めているウリハダカエデ、コミネカエデ、ソヨゴ等の小高木、低木種の発達による広葉樹林化を進める。

農学部正門から講義棟に至る村道には 60 余年まえの造園学実習で植栽されたユリノキが大木に育ち、ユリノキ並木として近在に親しまれ、紅葉の名所にもなっている。ユリノキは原産地の北米東部では数百年の樹齢に達するといわれているが、本校のユリノキは近年大形の枯れ枝が強風に煽られて村道に落枝することが多く、安全上の管理が問われている。10 月 12 日に千曲川を決壊させた台風 19 号は構内演習林にも風倒木被害をもたらし、2 本のユリノキを根返りさせた。ユリノキは今年の台風 21 号でも 1 本根返りしており、安全管理のための喫緊の対応が迫られている。根返りして村道を塞いだユリノキ

